

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



# いもぎと ダイヤリー

はあれむほけしよん

小説 伊吹泰郎

挿絵 高浜太郎

プロフィール

八月〇日 お兄ちゃんと夏祭りに行きました。

八月×日 兄さんとお風呂に入ってしまいました。

八月□日 二人でカレーを作りました。それから……

八月△日 あいつのこと、そんなに嫌いじゃないのかも

八月☆日 今日はお兄ちゃんの誕生日っ

プロフィール

006

016

062

107

149

202

251

## 登場人物紹介

Characters



なる み はるか

**鳴海 遥**

聖ヶ丘学院の二年生。優しくて  
気立てのよい美少女。



なる み ひなた

**鳴海 日向**

遥の妹。姉を心から尊敬している。  
少し生意気。

せ が わ  
**瀬川 ちさと**

聖ヶ丘学院の二年生。生真面目  
でしっかり者。



せ が わ じゅんいち  
**瀬川 純一**

聖ヶ丘学院の新米教師。ちさとの  
義理の兄。

「んっ……!!」

純一は小さく頷き、彼女にあてがっていた手を、自分のズボンへ移した。すでに指は蜜にまみれてふやけそう。それをぎこちなく使ってズボンの前を開き、トランクスも下げ、膨らんだ怒張を外へ引きずり出す。

もつとも、目に涙を浮かべたちさとには、それが見えないらしい。

「いやっ……離れないでくださいっ! もお苛めないでええっ! 兄さあんっ!」

彼女に料理をしていた時の初心うぶな物腰は残っていないかった。風呂場で秘所を貫通されながら身体を洗われた時そのままのはしたなさ。

純一は説明する間ももどかしく、遙を嬲りながらちさとの後ろへ立った。片手でペニスを上下に揺らして位置を合わせ、先端部を愛液まみれの秘所へめり込ませる。

グチュッ!

青年の粘膜と高熱の媚髪が重なった刹那、義妹にも意図が通じたようだ。

「ふひああっ!? に……にいさっ……あああんっ! 来てっ……くれたああ……っ!」

彼女は悲鳴を一転、悦びに高くする。

純一も、もう膣奥へ通じる穴を探り当てるのに手間取ることはなかった。鈴口や裏筋が火傷しそうな悦楽は相変わらぬが、それに耐えて——ズブリッ!

巨根を埋没させ始める。

「ああああひっ!」

まだ亀頭の先が粘膜をこじ開けただけに、少女は落雷を受けたように背を反らした。可愛いよがり方を前に、純一は勇躍。削岩機さながらに侵攻速度を上げる。

「はっ……ああおっ?!　いう……ふっ……ああんっ!　は、入ってきひ……いいっ!」  
遠慮のない突貫に、テーパーの上で拳を握ってわななくちさと。彼女の強張った手と同じく、剛直を出迎える膣圧も苛烈だ。

遙に負けず劣らずの狭さと、熱病にかかったような体温。沸騰さながらの愛液——。純一は底なし沼にでも飲まれていく気分である。

「ちさと……おっ!　うっ……くううっ!」

自分で意図しての動きとはいえ、一気に達しかけてしまった。食事の間から興奮を重ねたところで殺到してきた肉壁に、ペニスはカレーの材料よろしく、トロトロと形を失ってしまいそうだ。

精液をぶちまけずに済んだのは、これまでの経験がものを言ったからである。

尻を引き締め、尿道も絞って。だが、どうにか堪えたものの、淫猥な膣肉の脈動には、到底慣れられるものではない。

義妹の子宮口に剛直を押し当てたまま、ゼエゼエと肩で息をする。

そんな彼を現実へ呼び戻したのは、遙のおねだりだった。

「お兄ちゃああんっ!　指でいいから……お兄ちゃんが来るまで待つてるからあつ!　お願いっ!　続けてほしいのおおっ!」

「あ……う、うんっ！」

結合の衝撃で、気付かないうちに愛撫が止まっていたのである。

純一は自らを鼓舞して、彼女への抽送を再開した。今度は股間から背筋までを鋭い愉悅に貫かれながらのため、動きも一段と乱暴なものになる。

どれだけ擦ってもすぐに元の小さすぎるサイズへ戻ってしまう遥の膣道。それを開拓するように、青年は何度も何度も、指を捻ったり曲げたり。愛液を泡立てながら、愛らしい妹分を責める。

もつとも、遥は獐猛な動きが気に入ってきたようだ。

「んやあああひっ！ お兄ちゃんっ……お兄いっ、いひやあああつ!? すごっ……すごいっ……よおあああうっ！」

早くもエクスタシーの気配が濃厚となり、少女は自分でも腰を前後に振りたくる。テーブルの上ではツインテールの髪が、下ではエプロンの裾が、ユサユサと踊った。

一方、ちさとはまず悦楽を擦り込む動きで、気分を高めるのが好みらしい。

「ひいっ……く、ううあつ……私いひっ……兄さんでっ……兄さんでっ……いっばいになつてっ……ますううううっ！ んくふっ……くはあああうっ！」

穿たれたままの膣口を上下左右にのたくらせ、異物の感触をじっくり味わっている。

それに気付いた純一は、

（そろそろ……俺も動けそう……だな……っ）

腰での字を描き、大事な義妹に応えた。

又チュルツ！ズ……ズニユ……ジュプグツ！

亀頭や肉竿を周囲の粘膜へ丹念に押し付ける動きは、純一に喜悦ともどかしさを、いっぺんにもたらず。

もつと速く、強く。直前まで蜜壺の中で身動きもできなかつたくせに、欲求だけはどんどん強まった。そして、高まりきったところで、青年は一気に腰を引き、溜めた力で子宮口を突き上げる。

瞬間、またもペニスは、爆発的な快感で押し潰されそうになった。疼きは背筋をも駆け抜け、弾丸さながらに脳天まで撃ち抜く。それに操られ、二撃目、三撃目、四撃目――。

グチュツ！ズプププツ！ズチョツグヂョツプジュプツ！

熾烈な突き入れに、ちさとも浅ましくよがり出す。

「ひあああつ!! おおつ、奥まで来てるううつ！やはっ……響くうううつ!! でも……ああおつ……もつと欲しいんですううつ！わたし……待ってたんですからあああつ！」

顔こそ見えないものの、ビクツビクツと断続的に痙攣する背中は、量を増した汗で水を浴びたようにびっしょりだ。その色合いと光沢が、さらに青年の劣情を煽る。

だが、横を見た途端、悶絶寸前で首を曲げる遥と目が合った。愛くるしい彼女の顔は、涙や汗などでぐしゃぐしゃ。眼差しも焦点は合っていないが、不思議と求めるような光だけは、はつきりしている。その唾液をこぼす唇が、必死の懇願を紡いだ。

「お、お兄ちゃんっ……あああつ！ 助けてえええつ！ もおっ……おつ……お兄ちゃん  
んが来る前……にいひっ！ はあああつ！ 指だけでイツちやううううっ！」  
交互に入れると約束していたのに、彼女はまだ指で愛撫しただけ。

「ごめんっ……ちさとっ！ 一回、離れるからっ！」

純一は短く吠え、返事を待たずにペニスを引っこ抜いた。一方的だと分かっているが、  
会話に意識を割いていたら、気持ちよすぎて精液を止められなくなりそうだ。

ヂュポポッ！

激しい動きそのままに下がったせいで、居並ぶ褌の全てがカリ首に引っ掛かり、純一の  
血流は、動脈も静脈も関係なしに駆けずり回る。秘洞から出たペニスも、飛び跳ねるよう  
に切っ先を天井へ向けた。その元気な動きに膣口を弾かれ、

「いひぎっ!!」

義妹から切羽詰まった声が迸る。もつとも、それはすぐにすすり泣きへと変わった。

「兄さあんっ……いやっ……ここで止められたらっ……私っ……おかしくなってしまう  
すううう……っ！」

「ごめん、ちさとっ……!!」

自分を引きとめる声に後ろ髪を引かれながら、純一は涎が止まらないちさととの下の口へ、  
中指を挿し入れた。

「いふひいっ!」

新たな悲鳴を聞きながら、少しでも間を持たせるため、思いつく限りのやり方で指を使う。上を引つ掻き、下をなぞって、付け根まで潜らせたところで小刻みに振動させもする。膣内はぐしよ濡れた。ひたすら狭いのに、愛撫はツルツル滑って、どんどん速められそう。「いひうううっ！ やああっ……兄さんっ……兄さああんっ！」

激しく頭を振るちさと。そこへ遥が手を伸ばす。

「ひ……んっ……ち、ちさとちゃんっ……ワガママ言っちゃって……ごめっ……ねえ……っ！ でもっ……あひいっ！ わたしっ……も、無理……なのおっ！」

力が入らない中、一生懸命腕を持ち上げているらしい。

「あっ……遥……さんっ……あああっ！」

ちさと震える腕を上げ、その手を握り返した。

睦み合う指と指。密着する掌。それぞれの快感を共有するような仕草に、純一は彼女らを一度に弄んでいるのだと実感する。

「うあっ……はうううっ！ に、兄さんっ……後でっ……ま……たっ……あんうあっ！」  
義妹はせめて指から得られる刺激を余さず受け取ろうとし始めているらしかった。その淫狼ながらも健気な姿に胸を打たれながら、純一は遥の後ろへ歩み寄る。幼膣から指をズポッと引っこ抜けば、

「きゃひいっ!!」

遥もペニスが離れた瞬間のちさとと似た声を上げた。だが、こちらの割れ目へは、即座

にその太いものをあてがう。

「あはうっ……あはああっ……おっ……兄ちゃああんっ……わたしっ……指でイカないよ  
うにつて……頑張つてたんだよお……っ！」

少女は首を無理に捻つて、青年を見つめてきた。その瞳に宿るのは情欲と、飼い主へ甘える子犬さながらの信頼感。だが、どんなに惚<sup>ぼろ</sup>けても、奥にはちさとへの氣遣いを混じらせている。

「遙ちゃん……待たせちゃったね……っ」

潤んだ瞳に吸い寄せられ、青年はクレヴァスへの侵略を開始した。ありつたけの力を籠めて——前進！

ヌブグチュツ！ チュブズブウウツ！

「んひゃああっ!! ひぎ……いっ……はおっ……お……うはああおおふううあっ！」

有無を言わせぬベニスの力強さに押され、テーブル上で遙の背中が反り返る。指戯に翻弄されていた彼女は、たった一突きだけで浅い絶頂を迎えてしまったらしい。ちさこの手をきつく掴み、巨根も力いっぱい抱き締めてくる。

「うぐっ！」

急所を握られた青年も、少女に続く形で硬直した。粘膜から押し入ってきた悦楽は、魂まで直接叩いてくるよう。だが、彼が動けなくても、媚褻の締め付けは一向に和らがないのみならず、

「はっ……ひいっ……あう……あははあああ……っ」

最初のショックから抜け出した遙は、ゆっくりとだが尻を泳がせ始める。夢遊病にでもかかったように右へ左へユラユラと。それだけでも膨張しきった逸物には、茹だつてしまひそうに凶悪な刺激をもたらした。

ちさとの膺壁も固まりかけた指を熱心にしゃぶり続けている。

（ふ……二人……とも……そんなにつ……いっ！）

純一は菌を食いしばった。だが、立ち尽くしているだけでは、遠からず腰が抜けてしまふかもしれない。額や背中も、浮き出てきた大粒の汗にくすぐられ、むず痒くて堪らない。「うっ……くうあああっ！」

純一はヤケクソのように大声を上げ、逞しい往復を開始した。

ジュポツ！ グブポツ！ チュグツチュグツグウツ！

ジェットコースターさながらの動き。肉棒は入れても抜いても、火照った秘洞に抜き上げられる。だが、もう構わない。オルガスムスを感じる前に腰を引き、精液が噴き出そうとする前にまた突っ込んでやる。先ほどの指戯を再現するような、容赦のないやり方だ。

逆にちさとの方では、ペニスでやっていた粘着質な動きを復活させる。巣穴で這いずる蛇のように、膺壁をグリグリと撫で回した。

「そんな風にされたらっ……ひやあああっ！ 指でっ……あああっ……イクうううっ!? イッてしましますうううっ！」

「あああああつ！ お兄ちゃんっ……お兄ちゃんあああんっ！ 動いてるうっ！ 当たってるよおおおっ！ 気持ちいいのがっ……あああああつ！ またイキそおなのあああつ！」

前触れもなく過激になった動きには、少女達も振り回される。

特にイッたばかりの遙は、異常なほど感じやすくなっていた。子宮口までほじられる毎に、ツインテールの髪を振り乱し、半狂乱の絶叫を迸らせて。膣圧も一瞬たりとも抜けることがない。きついかな、きつすぎるかのどちらからだ。

グジュプツ！ ジュポツ！ ヌヂユツズヂユツグヂユツ！

抽送が凶暴になりすぎたせいで、純一も遙も身体がガクガクと跳ねる。

「んきひっ……ひぎうっ！ これええっ……どんどん強くっ……ああああつ……どこまで行っちゃ……あつ……またイッちやうううっ!! きひっ……うっ、あはううあああつ!!」

浅いオルガスムスの連続で、少女は官能の高みのさらに上へと連れ去られていくようだ。つた。尋ねられた純一も、彼女がどこまで淫らになるのか分からない。答えようがない。

「お兄ちゃんあああああつ！ イクッ……イクのがっ……壊れっ……ああつ……はっ……うああふううんうふあああああつ!! ひっ……おっ……イ……キっ……い……いっ！」

ついにアクメが止まらなくなってしまったらしい。切れ目なく悲鳴を迸らせたせいで、遙はとつくに呼吸困難。秘洞も『きつすぎる』のみとなって、ペニスを絞り続ける。

おかげで純一も昇天間近だ。

子宮口をこづいているのか、愛液でヌルヌルの肉壁を抉っているのか――。



「おっ……お姉ちゃんと一緒だったら……純一の相手……してあげてもいい……よ……」  
そっぽを向き、唇も尖らせているが、それらは照れ隠しのため。

彼女はついに遥と純一の関係を認めてくれたのだ。

その第一歩のように、首を曲げて姉を見上げた日向は、とんでもないことを言う。

「お姉ちゃん……パイズリってやってみた……？」

（パイ、パイズリ……!!）

いきなり飛び出した単語に、純一は胸がドキリとしてしまう。無論と言うべきか、彼の方は意味をしつかり知っていた。だが、尋ねられた遥はきよとなっていて。

「パイ……ズリ？」

オウム返しに聞いてから、「あっ、分かった」とニッコリ微笑む。

「お菓子の名前でしょ？」

純一は膝が砕けそうになったが、日向も嘆息している。

「……違うってば。大外れ」

そこで少女は純一へも見せ付けるように口の端を上げた。

「パイズリってのはね、胸でおちんちんを気持ちよくしてあげる方法なの。純一も好きだ  
と思うわよ。……今もお姉ちゃんの胸をやらしい目で見てるんだもの」

「え？」

遥が弾かれたように青年の顔を見つめてきた。

「あ、いやっ……まあ……」

純一は慌てて視線を反らす。日向の言葉通り、目は無意識に遥の巨乳へも向いていたかもしれない。

「ほら。お姉ちゃん、試してみれば？」

と小悪魔っぽさを取り戻しながら日向。遥も純一に見られていたと思っただらしく、「うん……」と恥じらうように頷いた。

「えと……ヒナちゃん、どうやればいいのか教えてね……？」

声をかすれさせながら、少女は胸元で結ばれたリボンをシュルリとほどき、ブラウスのボタンも下から順に外し始める。

「お兄ちゃん……パイズリ……してあげる……」

言ったすぐ後で、彼女のブラウスの前は全開となった。次いでブラジャーがズリ上げられ、プルンッ！

カップの下から巨乳がまろび出る。下着の縁が引っ掛かった直後、膨らみはこぼれ落ちそうなほどタプタプと揺れるが、瑞々しい形は瞬時に取り戻された。ピンクの乳首も、残像が見えそうなほど上下に弾んだ後、チョココンと定められた位置へ収まる。

張りりと柔軟さの両方が見られる、青年にとっては、血が逆流しそうな一瞬だ。

「お姉ちゃん……おっぱいでおちんちんを挟むんだよ……」

「んっ……やってみる……」

指導を受けた遙は、下から支えるようにたわわな乳房を掴み、膝立ちで純一の許へ戻ってきた。ヨチヨチと動く姿は、歩き始めの幼子にも似ている。子供っぽい顔立ちもあつてか、ひどく倒錯的に見え、純一は自分から遙へ近寄ることができなかった。

やがて、青年の前まで来た少女は、

「こお……かなあ……」

自信なさげな口調ながらも、バストでペニスを包もうとし始める。といつても、不慣れた彼女のこと。魅惑的な膨らみは、性器だけでなく、陰毛の生え際へもめいっばい押し当てられた。いわば青年の下腹部と乳房とで、反った肉竿をサンドイッチする格好だ。

男性器の裏面は、ゴツイ陰茎に合わせて従順に形を変える巨乳で、ぴっちり覆い尽くされる。空気が入る隙間すら排除された上、少女の胸は小粒の露が浮き出るほど火照っているから、今にもものぼせてしまいそうな熱さだ。

一方、表側は青年自身へ擦りつけられ、ちぢれた陰毛でくすぐられたり引つ掛かれたりだが、それを為すのも小柄な遙の体重なのだ。

少女の奉仕は、性器の両面どちらにも擦り込まれ、純一は尿道のみならず、喉まで塞がれたような心地にされた。

だが、遙は納得しない。乳房の柔らかさのみで陰茎を包もうと、手を胸の横脇へやる。

「んっ……と……挟むん……だよね……？」

押さえる位置を変えたため、膨らみは割れる寸前の風船さながらにたわんだ。ペニスと

柔肌もズリツとずれかけ、

「あつ……やんつ……」

彼女は反射的に指先へ力を籠め直す。途端に乳房の重みが強まり、竿は妙な方向へ捻じ曲げられそうに。

「おくつ!!」

少女のささやかな失敗は、純一に先の読めない痺れをもたらした。摩擦と圧迫は不規則に変化するし——。

「後……もおちよつと……お……」

遥が諦めないから、ペニスは乳房もろとも捏ね回され続ける。

意図しない動きでこれなのだ。やり方次第でもつと気持ちよくなれそうな気がして、青年の中ではもどかさも頭をもたげる。焦らされ続けたら、汗や我慢汁と一緒に、踏ん張る力も体外へ洩れ出てしまいそうであった。

「はっ……遥ちゃんつ……それつ……ちよつと……つあつ!!」

純一が我慢しきれなくなる直前、剛直はやつとふくよかな谷間に収まった。竿の部分は丸ごと隠れ、亀頭の上端が、外の様子を確かめるようにピョコンと覗く。だが、安心するにはまだ早かった。

乳房は口や舌、濡れ膺と違って、ねちっこく絡んでくることがない。湿った若い肌は重量感こそあるものの、どこか儂げだ。遥の試行錯誤も止まったため、純一の気分は宙吊り

となり、浮上することも沈殿することも叶わなくなる。

「うご……い……」

純一が頼もうとした時、

「そこから……上下に動くんだよ……お姉ちゃんっ……」

姉の背後に回り込んで膝をついた日向が、自分の手も巨乳に添えた。その小ぶりの指が、ひしゃげた膨らみへめり込み、一段と卑猥な縦長の形へ作り変える。

日向の締め付けは、虜となっていた巨根にも伝達。血の溜まった海綿体を揉みほぐす。

「こういうのがほしいんでしょ？」と挑発するかのようでもあった。

「ひやつ……ヒナちゃん……っ？」

唐突に胸を揉みしだかれた遥は、あからさまにうるたえるが、「ふっ」と耳元へ吹きかけられた吐息に、たやすく言葉を封じられてしまう。

「お姉ちゃん……ちゃんとやってあげたいんじゃないの……？」

日向の口調は、先ほど恥ずかしい姿をさらす羽目になったお返しをしているよう。姉妹の立場は簡単に逆転してしまっていた。とはいえ、遥の奉仕の気持ちまでは失われぬ。

「う……うんっ……!!」

彼女は小刻みに震えながらも、言われた通り、緩急を付けて胸を上下に揺らし出した。

途端にペニスの薄皮と粘膜が、バネのように伸び縮みさせられて疼き出す。エラや裏筋も湯ですすがれるのに似た熱い痺れに見舞われた。

待っていた技巧的な動きが、ようやく開始されたのだ。バストが動く、パイズリには手コキ以上の柔らかさと、フェラチオ以上の質感が生じる。さつき足りなかったものが補充われ、さらに大盤振る舞いとばかりに山盛りされたよう。

陰茎の付け根にも、丸く膨らんだ乳首がチョイツチョイツ。乳房のお手伝いをするように引つ掛かる。それは純一にオマケのようなこそばゆさをくれるし、

「きやうつ……胸がつ……あんっ！」

遙も小さく喘がせる。しかし、少女は不安そうに妹へ首を曲げた。

「はああつ……はあつはあつ……これで……お兄ちゃん気持ちいいのかなあ……？」

「ふふつ、お姉ちゃんが……までしてるんだもん……気持ちいいに決まってるわよ……っ」日向の答えは、自分が愛撫されるかの如く、切なげにかすれていた。吊り目も妖しく細められ、舌なめずりまでしそうである。

「うん……うんっ、とつてもっ……良いよっ……遙ちゃ……んっ……！」

純一も首を縦に振って、少女の疑問に応じた。だが、彼の場合は、言葉よりも巨根の方が雄弁だ。

ニチュツ……ネチャツ……。

緩んだ先端は、餌を求める魚のようにパクパクと開閉し、またも我慢汁を滲み出させている。ローションめいた生暖かいヌメリは巨乳へも広がった。

「あ……わたしね……おちんちんに触つてると……ムズムズしてきちゃう……のっ」

遙は青年を見上げつつ、ペロツと出した舌で亀頭をねぶり始める。

「うあつ!? は、遙ちゃんっ……そんなことまでっ……!」

上半身の往復がそのままのため、舌はもぐら叩きのように媚粘膜へ当たってきた。特に鈴口など左右へこじ開けられそうで、青年は反射的に腰を引きかけてしまう。が、口が離れると、また同じことをしてほしくなつて。どこかマゾヒスティックな気分だ。もちろん、周囲の亀頭粘膜をチュルチュル啜られても、すこぶる気持ちいい。

「ああ……お姉ちゃんの胸……柔らかくて……あつたかくて……大好きいっ……!」

手助けする必要がなくなつた日向は、姉を愛撫することに集中し出した。しこつたピンクの突起を、二ついつぺんに摘み、ダイヤルを扱うようにクリクリ捻る。すると、遙も性感の支配権を奪われたかの如く、

「はうっ……あつ……ヒナちゃんっ……やああつ……そんなことっ……されたら……っ……お、お兄ちゃんにしてあげられなくなっちゃう……よおおっ!」

若い肢体をはしたなく震わせた。舌は亀頭から遠ざかつてしまふが、代わりに熱い吐息が降ってくる。乳房の振動もこれまで以上にランダムとなり、青年を呻かせた。

もはや、どんな動きにも、剛直は反応してしまふ。最初に感じた歯がゆさなど消滅し、子種も解き放たれる機会を窺い始めている。その粘り気が、海綿体を一層硬くした。極太の陰莖は、まるで繰り返し胸の間へ打ち込まれる杭のよう。

(も……もう少しだけ……)



表面がピンと張ったので、男根へ浸透する快感も数倍に強まっていた。純一はそれを十分に味わいたいが、のめり込みすぎても達してしまふ、贅沢なジレンマに悩まされる。

だが、日向はそんな切迫感など関係なく、遙を玩具にし続けた。しかも、抱きついた背中へ体重をかけ、上半身を擦りつけることまで始める。日向の胸は成長途中だが、それだけにささやかな膨らみも愛らしい突起も、纏めて姉へ押し当てることができらしい。

「ああ……あたしの胸も……ふああっ……こうしてると……気持ちいいのっ……ほ、ほらっ……純一……あたしのことも見ていいからあ……！」

ずっと自分を敵視していた美少女から、媚びるように呼ばれ、純一の我慢はいよいよ持たなくなる。

遙も日向に胸を揉まれたり、乳首を引っ張られたり、背中の広範囲を撫でられたり。愛くるしい身悶えは派手になり続けている。

「ヒナちゃんっ……ちよつとだけ止まってえ……っ！ これじゃあ……わたしいっ……胸だけでイッチャうよおっ……！ パイズリっ、できなくなっちゃうっ！」

しかし、日向は姉の懇願に発情こそすれ、休ませようという気にはならないらしい。

「やううっ……純一ってば……お姉ちゃんをこんなやらしくしちゃって……えっ……けど……エッチなお姉ちゃんも……素敵……いっ……！」

「ヒナちゃんっ……やめてええっ……わたしいっ……お兄ちゃんのおちんちんだけでもっ……おかしくなっちゃいそおなんだからああっ！」

これでは、落ち着きたかった純一でさえ、遙を日向と挟み撃ちしたくなってしまふ。

「お……俺も動くよっ！」

彼は豊かな胸を正面から押し潰すように、腰を忙しく行き来させ始めた。

ニユルツ……チュプツ……クチュチュツ……！！

陰茎はきめ細かい肌の上を走り、塗りたくられた先走り汁で妖しい水音を奏でる。亀頭もこれまで以上の積極さで胸の間に出入りし、悦楽でエラからすっぽ抜けそう。

「出るっ……出るよっ……遙ちゃんっ……俺っ……もうすぐっ……イクからねっ！」

「いひううっ!! 出るのっ……? 出るのおおっ? おお兄ちゃああんっ……!!」

遙も引き攣るように四肢を強張らせた。そこからバストがめちやくちやくにくねり出す。手の力も急に強まる。

「お……お兄ちゃんっ……イツてええっ……わ、わたしっ……そろそろっ……無理……いっ……ふああっ! だからあっ……お兄ちゃんっ……お兄ちゃああんっ！」

自分が果てる前に青年を満足させたい、そんな気持ちの伝わってくる精一杯のやり方であつた。だが、彼女の頑張りを弄ぶように、日向の責め方も変化。左手はスルリと下へ落ち、スカートの中へ――。

グチュツ……ヂュプツ……！！

状態を確かめることすらしないまま、下着のクロッチをずらし、陰唇を嚙り始めたらしい。純一が驚くほどの水音が、カウパー氏腺液の粘っこい響きにかぶさつた。

「ひっ……ヒナちゃんの意地悪うああっ！ わたしっ……これじゃっ……あああっ！  
もっ……イクっ……ほんとにつ……イッちゃううううううっ！」

悶える遥の巨乳は、純一のピストンへやり返すように、グイッと斜めに押し上げられた。その当人の思惑とは無関係の動きが、捕まえていたペニスを活きのいいウナギさながらにチュルンッ！

真上にジャンプさせる。

胸と離れる刹那、陰茎を襲ったのは、ありえないほど苛烈な摩擦だった。

「うぎいひっ!?!」

純一の全身は、雷に打たれたように硬直。ペニスの付け根も例外ではなく、止めたかっ  
たはずの子種を、奥から搾り出してしまふ。白濁は陰茎内の細道も一直線に突っ切り、

ビュブプウウッ！ ドピュブッ！ グチャツチャツ！

快感に赤らんでいた遥の童顔へと降り注いだ。

「ひああああっ!? 来っ……たああんうううふっ！ お兄ちゃんのっ……お兄ちゃんのお  
っ……いっばいいいひっ！ あっ……くううあはおおあああああっ！」

濁流の勢いと粘度、臭気は、崖っぷちにいた少女を、問答無用で絶頂へと導く。開きつ  
ばなしたった唇へも流れ込み、口内まで蹂躪していった。

しかも、そこで純一はカクツと膝を曲げてしまふ。——ひよつとしたら、情欲に操られ、  
咄嗟に身体の向きを横へずらしたのかもしれない。その先にあるのは、身を乗り出して

た日向の幼貌だ。濁流の残りは、シャワーのようにそこへ飛び掛かった。

ドクドプツ！ バビュルウウブツ！

「きやううふつ!! やつ……ひぶつ……に、苦つ……やつ……これつ……精液いつ……!!」  
耳増とはいえ、実際には勃起ペニスを見るのさえ初の彼女にとつて、顔射はシヨックが強すぎる。小悪魔的な笑みは瞬時に打ち碎かれ、辛うじて目を閉じたものの、後は汚濁を無抵抗に浴びてしまった。

ベチャツ！ ビチャチャツ！ ビチュビチュツ！

「や……うぶ……ううう……つ」

頬も額も鼻筋も、勝気な顔の半分以上が生臭い液塊でドロドロに。

しかも、吐息でプクウ……ツ。唇の上に白く小さな泡が浮く。やがて、臉は緩慢に開かれたが、彼女から言葉が発せられるまでには、さらに数秒が必要だった。

「うあ……こんなネバネバが……赤ちゃんになるなんて……うそ……嘘お……つ」

だが、その時には、愛撫から解放された遥が、息を整えかけている。

「不思議だよね……。でも、せええきをお腹の中に出してもらおうとね……ビュクビュクつて広がる感じが……とつても気持ちいいんだよ……」

「お姉ちゃん……つ」

姉に寄りかかられた日向は、首を曲げて顔を見つめ返す。

「お姉ちゃんの顔……こんなに……汚れちゃって……」

だが、数秒後には、いきなり連携を開始したりもする。

遙の掌が根元をリズミカルに扱き出した途端、張り詰めた竿の皮を、ちさとの指が寄つてたかつてくすぐり始め。そうなれば、こそばゆさがきつい疼きに取って代わり、際限なく高まってしまふ。

「兄さ……ん……っ」「すぐく熱くなってる……よお」「大きくて……じゅる、太くて……」「ヌルヌルして……いますっ……」「あん……お兄ちゃあんっ……はむっ」

計二十本の指と二枚の舌が絶えず動きを変えながら、時に激しく、時に丹念に、ペニスを弄ぶ。純一は次第に、どこをどちらに責められているかも分からなくなってきた。

「うう……ちさと……お……はる……ちや……ああうっ！」

彼が汗で濡れた顔を上げれば、身体の左右では紺色の美尻が揺れている。遙は右側で、ちさととは左で、青年に背中を向けてしゃがみ、そこから上半身をペニスへ倒しているのだ。水着は伸びきって、双丘の谷間までが浮き彫りになっている。しかも、ところどころ汗を吸って黒く変色もしていた。

——違った。吸っているのは汗だけではない。一番濡れているのは、揃いも揃って股間部だ。いつも笑顔で自分を癒やしてくれる美少女と、規律正しい生徒会長が、フェラチオをしながら愛液をしどけなくこぼしているのである。

そして、玉袋。ここは純一の脚の間にしゃがむ日向が、重点的に責めてきた。

彼女は両手で睾丸をくるみ、貴重品を扱うように転がしている。丁寧な分、快感も繊細

だが、剛直が津波のような刺激に見舞われた時も、むず痒さは不思議と明確に感じ取れる。さらに時折、彼女は金玉の皮を摘み、子猫が毛玉で遊ぶように軽く引つ張りもした。その時だけは、存在感をアピールするかの如く、優しい感触が過度の疼きを呼ぶものへ急変。遙とちさとからの快感を飛び越して、脊髓を熱く占領する。

「やだっ……純一のっ……変な手触り……してらう……」

日向は思いつくままに感想をこぼしているらしいが、普段が勝気なだけに、どこか言葉責めめいた調子となる。

(う……お……俺もっ……)

純一は頭の両脇に投げ出していた手を浮かせた。日向には届かないが、せめてちさとと遙にはお返しをしたい。

揺れる二つの尻に掌を貼りつかせ、人差し指を水着へ侵入。前置きなしに陰唇を撫で上げた。

「ひゃふああっ!!」

「や……はああっ!!」

遙達の腰は、バネか何かを仕込まれていたように、大きく震える。

「おっ……おっ!!」

喘ぎの合唱だけでなく、秘裂の手触りにも純一は心が躍った。媚肉はどちらも卑猥に潤い、帯びた熱は指に火傷させんばかり。それでいて、青年がツンツと押せば従順に形を変

えもする。底なしに魅惑的なアンバランスさだ。

しかも、少女達の悶えは指と舌にまで伝わり、ペニスへの圧力が急激に強まる。

「うぐっ!!」

昂ったところで、手加減なしの快楽にさらされ、純一は危うく果てそうになった。しかし、どうにか尻に力を入れ、精液を食い止める。そして、またも自分がやる番だと、極小の秘洞を打ち抜いた。

「ひやあああつ!! お兄ちゃああんつ!!」

「ま、待つてくさいいっ……今は私達が……ああくっ!」

粘膜をかき分けられ、遥もちさとも悲鳴を高くするが、純一はもう手を止めない。

ヌルつきを堪能するように、遥の秘裂を鋭いピストンで抉り、ちさとに対しては陰湿なほど入念に指をなすり付ける。どちらも一人が好きと知っている動きだ。そして、時折、変化を付けるため、彼女らへのやり方を入れ替える。

「お兄ちゃああんつ! やああつ! ジュポジュポしすぎいいいひっ! かひいいつ!!」

遥が声を張り上げている時は、

「に……兄さん……そんなやり方っ……切ないのが……あ……大きくてっ……ああ……」

ちさとが許しを乞うように身を振る。

そして、純一からの責めが切り替わった途端、

「兄さあつ! 兄さあひいいいっ! ひおっ……いひいおおっ!! わたひっ……おか

ひくううあつ……ひああおおああつ!!」

「意地悪う……パイズリの時も……ちゃんとしてあげたかったのに……やうつ……また……わたしの方が気持ちよくなつちゃうよお……っ」

ちさとの喘ぎは天井知らずに高まり、遥の訴えは悩ましげなすすり泣きとなるのだ。

とはいえ、彼女らも指と舌を躍らせるのを止めない。先走り汁が飛び散るほど陰茎を擦り、亀頭もとことんしゃぶって、今まで以上に情熱的な淫戯を展開する。

肥大化しきつたところで、より強烈な快楽にじゃれつかれた巨根。先端も陰茎も欲張ってさらに大きくなるうとするから、ダイナマイトのように爆ぜてしまいうだ。

「おっ……それっ……いいいいっ!」

青年教師は呻くが、彼に二人の顔を見ることはできない。彼に見えるのは、ズレた水着から覗く陰唇のみ。どちらも底までかき回されて、涎さながらに蜜を垂らしている。指を使う前でさえ、水着を黒くしていたのだ。淫液は布団のシートにも、おねしょのような染みを作り始める。

彼女らの表情を見物できる場所にいるのは日向だった。

「お姉ちゃん……お姉ちゃん……可愛いよお! 先輩も……立派な生徒会長のふりして澄ましてるクセに……すぐくやらしい!」

姉達に触発されたか、彼女はそれまで使わなかった唇で、玉袋を丸ごと頬張る。しかも、口内では表皮の細かな皺を広げるように舌を蠕動させて――、

「んちゅぶつ……ぢゅぞぶつ……ぺろろつ、れろつ……じゅむつ……くふうううむつ！」  
数え切れないほどの皺一枚一枚へ、こそばゆさを浸透させてくるようだ。

いよいよヒートアップする喜びに、純一はものを考えるなど不可能となった。指戯からはあつけなく技巧が失せ、後に残るのは獐猛さだけ。

彼は本能の命じるまま、敷き詰められた敏感な媚肉を押し返し、愛液をかき混ぜた。親指も伸ばし、膨らんだクリトリスを引つ搔く。何度も引つ搔く。

欲望の権化と化しているため、射精を辛抱しようとする意思もなかった。集まった精子で、尿道がこじ開けられるのは分かったが、いつそ愛しい二人の少女も力押しで絶頂へ道連れにしたくなる。それを実行するべく、指を荒々しく振動させれば、

「きゃひいああつ!! イキ……ひうううつ……イツちゃうつ……よおおおつ! もつ……そんなにしちや駄目えええつ!」

「兄さんもおつ……兄さんもイツてえああおつ! 私達だけじゃ嫌なんですうううつ! いやあはあああつ!」

少女達も汗だくの尻を振り、粘液まみれの手と舌で肉棒を揉みくちやにした。

それぞれが大切な相手をイカせようとしながらも、実は三人とも絶頂間近。誰から墮ちてもおかしくない熱気に煽られ、室温までが上昇していくようだ。

隣家まで聞こえそうな嬌声と哀願が交錯し——真つ先に達したのは遥であつた。

「つ……ごめつ……ああんつ! ごめん……なさいいつ……! もうつ……イツ……イツ



ちやうううっ！ イっちやあああつ!! あああはあああんううふうあああああつ!!」  
仰け反る瞬間、彼女は自分だけ昇天するのが悪いことのように謝った。しかし、純一を  
挟み、ちさともほとんど同じタイミングで全身を収縮させている。

「兄さああんっ……兄さああああんっ！ イッ……イキますうううっ！ 私……いっ……  
んうひいいつくあああああああはああううあああああああ——っ!!」

打ち震える二人の腔壁は、咀嚼するように青年の指を食い締め、今にも肉襲の内へ取り  
込みそう。身体を突き抜けた快感で、舌と指も壊れたように引き攣り、逸物を乱暴に抜く。  
「いきいっ!!」

指を熱波に襲われ、媚粘膜の塊を一際責め立てられて、純一は奇声を発した。筋肉が縮  
こまるような、それでいてバラバラにほつれもしそうな法悦に押され、数日にわたって熟  
成されたザーメンは、喜び勇んで外へ噴出する。

ビュクビュババアッ！ ゲチュツ！ ベチャツ！ ドブツビュブブウウツ！

身体の芯に澱んだ悦楽が外へ出て行くのを感じながら、純一は魂まで浮き上がってしま  
いような解放感に己を委ねた。

精液の発射は一分ほどで止まる。と、急に身体へ重さが戻ってきて、今度は背中が布団  
へズブズブ沈むような錯覚に捕らわれた。

「うっ……くはっ……あああふ……ううっ……!」

精液がどこに飛んだか確認する術もないまま、純一は胸を上下させる。遥とちさとも両

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!